

よその町では給食実施へ

中学校給食の県下実施 8 割に、ランチサービスにこだわり遅れる鈴鹿市

18年度決算の審議の中で、中学校ランチサービスについて聞きました。昨年のランチサービス利用率は、平均5.4%で、その前年の3.7%より増えています。これは市が1食100円を公費負担し、値段を300円に引き下げたためです。それでも実数では、1日当り289食、生徒5366人のほんの一部の利用にすぎません。

9月13日の中日新聞では、「中学給食63校増に、合併効果・旧市部で格差是正」と報道、県下の実施率は4割から8割になる予定としています。北勢地方では、いなべ市・桑名市・四日市市・亀山市が実施または予定していて、検討も何もしていない市は、鈴鹿市だけになりました。

全生徒を対象にするのが学校「給食」の基本

各市の方式は「センター」「デリバリー」とそれぞれ違いますが、とにかく全生徒を対象にした「給食」です。これに対してわが鈴鹿市は、「弁当を持ってこれない生徒に、業者弁当を販売する」もので、「給食」ではありません。給食を求める親や生徒のねがいをねじ曲げて、ムリに始めた「ランチサービス」は、先の見通しなし、早いうちに方向転換するべきです。

平成18年度・中学校ランチサービスの実施状況(1日平均)

	平田野	創徳	白鳥	神戸	大木	千代崎	白子	鼓ヶ浦	天栄	鈴峰	合計
食数	20	21	10	39	68	18	20	27	53	13	289
生徒数	401	512	508	760	461	541	832	513	505	333	5366
利用率	4.9	4.1	2.1	5.2	14.7	3.3	2.4	5.3	10.6	4.0	5.4

市立保育所、建て替え計画なしでは

市内10ヶ所の市立保育所は、70年代ごろの建物が多く、いちばん新しい牧田でも築20年経過していて、老朽化が進んでいます。加えて、建設時には想定していなかった乳児保育や、最近の定員以上の入所受け入れ・詰め込み状態に対応できない、設備に余裕のない状態になっています。

しかし市の予算は、最低限の修繕をするのがやっとという貧弱なままで推移してきています。職員室のエアコンが、やっと今年で全保育所に付いたというように、必要な整備も遅れがちになっています。

「子育て支援」が、掛け声倒れにならないように

決算に関連して、建て替え計画は検討されているのか聞いたところ、今は修繕の「5カ年計画」があるだけで、学校施設のように順次建て替えていく計画などは、持っていないとのことでした。

「少子化」と言われる中でも、保育ニーズは増え続けていて、私立園が毎年出来ても追いついていきません。市立保育所もいまの水準に合った施設設備に改善するよう、まず計画をきちんと立てることを、強く求めました。

旧同和地域を「マイノリティ」という誤りをただす

同和対策法が失効して5年も経つのに、依然として「根深い部落差別がある」という偏見にもとづく「市民意識調査」を、市が行なうのは止めるべきだと議論をしている中で、担当者から「マイノリティ(少数者)」という言葉が出てきました。私は、この考え方は間違いだとただしました。

マイノリティとは、障害者とか外国人とかのように全体の中で少数である人のことを指して、そのことを理由とした差別をなくすという課題として使われています。しかし、旧同和地域への差別は「言われなき差別」であって、マイノリティではなく、同じ日本人の中での偏見による差別だったのです。

例えば、外国人差別がなくなっても、外国人であるということ自体は変わらず、マイノリティです。しかし、部落差別がなくなってもマイノリティとして「部落は残る」という考え方は大きな誤りです。あとには何も残らないし、実際に大多数の市民が、もう何とも思わなくなっているのです。

消防隊の基本は、4人でのチーム

9月23日、消防団の「操法技術大会」が石薬師の県消防学校で行なわれました。市内23地区の消防団が、消火のための作業のタイムと正確さを競い合うもので、今年の優勝は天名分団、準優勝はわが鈴峰分団でした。

9月議会で私は、消防職員が足りないため、出勤する消防車の3割が2人、3人しか乗車していないという現状を明らかにしましたが、この操法大会を見ると、問題点が良く分かります。1チームは必ず4人で編成しているのです。そして、現場に着いてポンプとホースをつなぐ者、筒先を持つ者、ポンプ操作をする者、放水を指示する者と、分担して消火作業にあたります。これを3人で出来るのか、いや2人だったらどうなるのかは、素人が見ても明らかです。



4人チームで行なう操法訓練

消防団員はきちんと人数をそろえているのに、本職の消防職員はまともな作業が出来ない状態のままというのは、早急に解決すべき問題です。

東大阪市長選・長尾君の新たな試練

理不尽な不信任強行に負けず、再び市民に支持うったえる

私の親友、東大阪市の長尾淳三市長が、就任1年で議会から不信任を決議され失職、10月28日の再選挙に向けてふたたび市民の信任を得るために頑張っています。不信任の理由は、議会で多数を握る自民・公明の「言うことを聞かないから」「共産党だから」というだけのオソマツなもの。これには多くの市民が驚きあきれ、「みんなが選んだ市長やのに」「何も失政がないのになぜ?」「長尾さんでええやないか」と、超党派で声を上げています。

9月23日の市議選には、この市民の怒りが集まって、共産党の9人が全員上位で当選、自民・公明は大きく票と議席を減らしました。私も1日応援に行きましたが、街頭でうったえる長尾君や共産党候補に、市民が次々に「ガンバレ」「あんな連中にまけたらアカン」と声をかけ、ムードは大きく盛り上がっています。市長選挙にも、もう一度応援に駆けつけます。

ずいそう

頭が良くなる数学パズル

自慢ではないが、私は数学が大の苦手で、小学校のときに「鶴亀算」というのがさっぱり出来なかったことを手始めに、中学、高校でも数学にはなるべく接近しないようにし、大学受験でも当時の5科目・7科目試験制度のおかげで、理数系のハンデを文系でカバーして何とかしのいできたのである。

一度だけ、高2のときに本気で数学を勉強しようとしたが、半月もしないうちに「十二指腸潰瘍」になり、数学よりも命が大事と悟ってあきらめ、そのまま今日に至っている。その後、結婚しようとした相手が数学の教師だと分かって2度目の試練を迎えたが、数学の知識がいくらあってもお金の計算など日常生活とは無関係だということが分かり、今日に至っている。

そんな私がいま一番おそれているのが、コンピュータである。この文章もパソコンで作っているのだが、与えられたワクに字を入れているだけで、「なぜこうなるのか」という原理がいまだに理解できていない。だから、ひょっとしてこの瞬間にプツッと止まったらどうしよう、という恐怖感を持ちながら毎日操作しているのである。

頭の柔軟性をいつまでも保ち続けるために

最近「数独」というパズルにこっている。右図のような表に1から9までの数字を入れていくのだが、 3×3 のマスに1回だけもれなく、しかも 9×9 の縦列・横列に同じ数字が重ならないように入れるのである。意外にむずかしいが、面白い。

寝る前とか、ちょっと時間の空いた時の「頭の体操」に楽しんでいる。これが長年の数学コンプレックスを軽くする役に立たないか、と期待しているのだが。

		7	4	2	5			3
		4					2	
		8			9		4	
	8						6	4
4								2
1	9						5	
	5		6			4		
	3					2		
8			7	5	2	1		